

リレー随筆

大正イマジュリイの世界に寄せて

永山多貴子

「懐かしくて、かわいくて、おしゃれ。」：昨秋、郡山市立美術館で開催した「大正イマジュリイの世界」展には、来場者からこうした声が寄せられました。

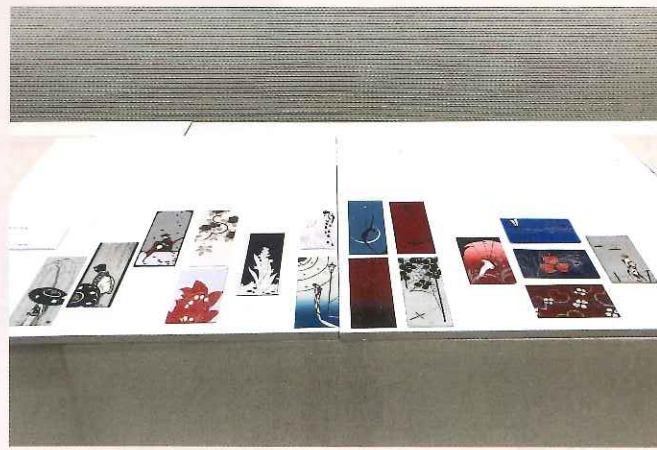
イマジュリイ“imagerie”は、イメージ画像を意味するフランス語ですが、本展では、本や雑誌の挿絵、装幀、絵はがき、ポスターなど、大衆性の高い印刷物の総称として用いられています。世の中で個の自由を求める機運が高まり、女性や子どもの教育に



も変革がもたらされた大正期、出版文化の急速な発展を追い風に、イマジュリイの世界も黄金時代を迎えました。当時、さまざまなイマジュリイを舞台に活躍したのが、藤島

武二、橋口五葉といった若き画家たちです。彼らは斬新で魅力的なデザインで多くの人々の心をとらえました。さらに杉浦非水などの図案家たちが登場し、モダンデザインに大きな影響を及ぼします。本展では、彼らと与謝野晶子や夏目漱石といった同時代を代表する文筆家たちと共同で手がけた美しい装幀本や、洗練されたデザイン画などが展示されます。また、竹久夢二、高島華宵、落谷虹児、小林かいちといった、抒情画家たちによる雑誌の表紙絵や挿絵、絵はがきなども大きな見どころです。

特に小林かいちによる美しく色鮮やかな木版刷りの絵はがきと絵封筒は、当館でも反響が大きく、「すっかりファンになった」という感想もありました。かいちの絵はがきや絵封筒には、アールデコ調のモダンな雰囲気や纏った物憂げな女性たち、バラの花やハート、クジャクの羽といったモチーフが、ぼかしを多用



した精巧な木版刷りによって美しく彩られています。大正末から昭和初期にかけて図案家として活躍した小林かいちについて、いち早く世に紹介したのが本展覧会の監修者、山田俊幸氏（元帝塚山学院大学教授）でした。20年近く前、先生の研究室で赤やピンク、群青色が際立つかいちの絵はがきや絵封筒をまとめて見せていただいた時の、幸せな驚きと興奮を今でもはつきりと憶えています。

「大正イマジュリイは生活の中に花開いたデザイン」。これは、昨年11月に急逝された山田先生が、大正イマジュリイについて最後に残されたことばです。展覧会の会場では、時を経てもなお輝きを増し続ける大正イマジュリイの多彩な世界を、身近な感覚でご堪能いただけることでしょう。

（郡山市立美術館 館長）

※「大正イマジュリイの世界」モダンデザインの饗宴」（令和6年9月7（土）から10月27日（日）まで郡山市立美術館において開催。



高知県立文学館ニユース

藤並の森



企画展 いなかずまいは至極無事ぢや

漢詩文を 楽しむ 五山文学展

令和7年1月18日(土)〜3月23日(日)

「いなかずまいは至極無事ぢや」漢詩文をたのしむ五山文学展」現在好評開催中です。

五山文学は鎌倉時代から江戸時代まで続いた禅僧たちの文学で、土佐人の文学としては筆頭に重要なものなのです。これまでなじみがなかったという方が多いのですが、現代の私たちも共感できる詩



展示室入り口

が多々あります。

今回の展示では、吸江庵をひらいた伊勢出身の夢窓疎石、ともに土佐出身で五山文学の双璧と呼ばれる義堂周信、絶海中津の作品をご紹介します。ですが、故郷を詠んだ詩から色気を含んだ詩などさまざまです。とくに戦争の虚しさを描いた詩は、室町時代という混乱の時期にあり、時の権力者に頼りにされていた僧という立場でなければ詠めないものでしょう。

展示では今回イラストを担当していただいた中村達志さんの画、見る機会の少ない高知の貴重な資料の数々が展示され、お客様を中世へ誘います。なかでも評価が高いのは、地元高知の高校生が書いた漢詩の書道作品です。どの書も真摯に作品に向き合ってくれていることが伝わり、心を打たれます。また、当館の朗読カルチャーサポーターによる作品朗読も好評ですので、興味のある方はぜひ聴いてみてください。



吸江寺ご住職の小林さんのおはなしの様子

イベントでは、「津野のお菓子でお茶席」、吸江寺のご住職の小林さんのお話を聞いたあとに筆ペンで漢詩を写す「おはなしと写漢詩体験」などを行いました。お茶席イベントは茶の湯文化学会高知支部の皆さんのご協力の下、義堂と絶海の故郷とされる津野町にある吉村虎太郎邸で作られた和菓子を振る舞いました。が、大変に可愛らしく、歓声が上がりました。また写漢詩イベントでの小林さんのお話は興味深く、その後の楠瀬美保先生の指導による義堂の詩「吸江庵」の書写、そして浮月さん指導の色紙への装丁も参加者に喜ばれました。

五山文学展は3月23日までの開催となります。ご来館の方にはもれな



お茶席イベントで振る舞われた和菓子

く冊子を差し上げております。知れば楽しい漢詩文の世界、ぜひあなたでもいらしてください。

(学芸課/川島禎子)

スマホをかざして読み取ると、「五山文学」の朗読が聴けます。



次回開催
会期中
休館日なし

花咲く モダンデザイン

～大正イマジュリーの世界～

令和7年 4月5日(土) 6月15日(日)



「大正デモクラシー」「大正ロマン」などの言葉に象徴される大正時代。第一次世界大戦や関東大震災などもあり激動の時代と言われますが、西欧文化の影響を受け技術革新が急速に進み、文学、美術、音楽といった芸術の世界のみならず、身近な日常生活にまで自由と個性を尊重する考えや新様式が取り入れられた時代でもありました。

高知県立文学館の春の展覧会は「大正イマジュリーの世界」をご紹介します。
イマジュリー“imagerie”とは、イメージ図像を意味するフランス語です。本展では、本や雑誌の挿絵、装幀、絵はがき、ポスター、広告、漫画など、大衆性の高い版画や印刷物の総称として、このことばを用いています。



竹久夢二《涼しき装ひ》『三越』第15巻6号 1925(大正14)年



杉浦非水 『三越』第22巻第5号(表紙絵) 1932(昭和7)年

出版文化も急速に発展し、藤島武二、橋口五葉、竹久夢二ら新しい表現方法を模索していた画家たちがさまざまなイマジュリーを舞台に活躍。多彩で魅力的な表現を生みだして人々の心をとらえました。こうした動きのなかで、やがて杉浦非水をはじめとするグラフィックデザイナーが誕生し、日本のモダンデザインに大きな影響を及ぼしていくこととなります。
本展では、展覧会監修者である山田俊幸氏の膨大なコレクションのなかから、独創的な発想、奇想、幻想で人気を博した13人の画家・版画家・挿絵画家・工芸家らの装幀や挿絵、デザイン画を展示します。あわせて、「さまざまなイマジュリー」と題して浮世絵・震災・怪奇美などのテーマに分け、モダン感覚あふれる多彩なデザインを



橋口五葉
夏目漱石著
『吾輩ハ猫デアル』下編(挿画)
1907(明治40)年[第3版]



小林かいち《彼女の青春》
(絵はがき)
1925(大正14)～
1926(大正15)年頃

紹介していきます。
さらに、大正9(1920)年に創刊された雑誌「新青年」や同時代に活躍した高知ゆかりの文学者紹介のほか、四十町町観光協会の皆さんのご協力のもと、高知県四十町にある「大正」地区のユニークな取り組みも紹介します。高知ならではの「大正」もぜひお楽しみください。
大正時代は約113年前となりましたが、当時の人々の高い美意識はレトロモダンとして現代でも愛され続けています。百花繚乱の春、本展で、絵画作品とは異なり、大量生産され人々の暮らしの身近にあった印刷物たちの、小さいながらも美しく広がる豊かな世界を感じていただければ幸いです。
(学芸課/福富陽子)

追悼 市原麟一郎先生 土佐民話よ、永遠に

1月5日、市原麟一郎先生の追悼展が無事閉幕しました。会場には市原先生の教え子の方々も来館され、教員時代のノートや写真、映像などを熱心にご覧になりながら、在りし日の先生を偲び、懐かしく思い出話をされていました。

本展では市原先生が愛した土佐民話の豊かさ、面白さを次世代に伝えていくことを大きな目的として団体プログラムに力をいれ、幼稚園や保育園、放課後等デイサービスなど、のべ14団体が参加してくださいました。

「文学館語りと紙芝居の会」会員さんの公演で市原先生の紙芝居を楽しみ、展示室では市原先生採集の民話をマッピングした「高知県ジオラマ民話マップ」に子どもたちは大喜び。目を輝かせて民話の旗印を指さし、「これはどんなお話?」「次はこのお話!」とお話をリクエストしてくれ、子どもたちは本当にお話を聞くのが



大好きなんだと実感しました。そして何よりうれしかったのは、団体プログラムに参加したお子さんが、後日、保護者の方と来館し

てくれたこと。

ジオラマのそばのイスに座り、民話カードを手にお母さんにゆっくり読み聞かせてもらう姿をみて、市原先生が生涯をかけて取り組んだ民話伝承のお仕事の一助になれたのではと、大きなやりがいを感じました。

企画展開催にあたり、全面的にご協力くださった市原麟一郎先生のご遺族の皆さま、ご講演いただいた常光徹先生、寄稿してくださった中脇初枝先生、楽しいえんこうの絵を描いてくださった藤本知子先生、挿絵の使用を快諾してくださった狩野富貴子先生、田所のりあき先生、森本忠彦先生、故飯原一夫先生、ジオラマ用に木工ミニパネルを制作してくださいました、高知県立高知農業高等学校森林総合科の皆さまはじめ、展示にご協力くださったすべての皆さま、そして来館者の皆さまに心より感謝申し上げます。

当館では、『市原麟一郎土佐民話資料集』の刊行を計画しています。土佐民話研究の基礎資料として、地域振興の一環として、また、各学校等での郷土学習の資料として、幅広くご利用いただけるよう準備中ですのでご期待ください。

(学芸課／岡本美和)



令和7年度常設展企画コーナー

北見志保子生誕140年

～この人をこそわれは恋ふらめ～

会期 令和7年4月1日(火)～
令和8年3月22日(日)



北見志保子『朱実作品集』昭和9年大道社より

令和7(2025)年は宿毛出身の叙情歌人、北見志保子の生誕140年の記念年にあたります。北見志保子は本名川島朝野のち浜朝野。通称あさ子。山川朱実の名で小説も発表するなど、大正

から昭和にかけて活躍しました。中村出身の歌人で「霸王樹」の創設者・橋田東声と結婚し、その前半生を献身的にささえました。しかし、十二歳年下の運命の人・浜忠次郎と出会い、志保子の人生は大きく動きます。許されざる恋のため、フランスへと旅立った忠次郎と奈良を逍遙する志保子。その辛い日々を耐え、愛を貫いた志保子は「平城山」に代表される数々の叙情的な歌を残しました。大正十四年に忠次郎と再会・結婚後は、歌誌「草の実」の創刊にはじまり「月光」「花宴」などを主宰、戦後は女人短歌会を結成し、女流歌人の育成にとめた功績は高く評価されています。

(学芸課／岡本美和)

土佐文学さんぽ

行政者・元高知市長・
ホトギス派・俳人・随筆家
大野 勇
谷 是

迫した食糧の配給、復員者の就職の
あつせん、長期展望に立った都市復
興の問題。清水真澄を建設局長に立
て、昭和21年7月1日に起工式をあ
げた。「ローマは一日にしてできたも
のではありません。高知市民は不断
の努力をしなければならぬので
しよう」と演説をし、自作の「復興謡
曲」を感慨込めて謡った。その前に
公職追放により失職することを察
知し、秘かに、市会議長に、辞職届を
手渡してあつたと言われる。

以来、悠々閑居、「故山帳」「浦戸湾
の釣」「高知の釣文化」「わたくし」
『三極の恩人』『喜寿凡語』『終凡語』と
歩いた路など、戦前のものを加え
ると膨大な著述をしたが、ことに
『凡語』と称した著述は、一種の人生
哲学とも言うべきもので、日常茶飯
事の中から感じた語句や文章を、さ
らりと表現した集録集で、その含蓄
の深さは、歴代の市長も「師表」とす
るものであつた。昭和48年11月5日、
93歳で没。同郷の吉岡重忠著「大野
勇先生の生涯」が残されている。旧
居前の鏡川河畔を散策する、長身の
風貌が忘れられない。

(郷土史家)

「大野勇」と言えば、戦中、戦後と
高く評価された人物である。明治13
年1月に高岡郡別府村川渡(仁淀
村)に生まれた。小学校の教師、直賢
の長男。川渡小学校、佐川高等小学
校、高知師範学校を卒業。高岡郡久
礼小学校校長、台湾総督府中学校、長
野県松本中学校と、教員生活を送
り、大正6年京都市の視学になる。
4年後に同市社会課長、昭和2年卸
売長兼市場長となり、広島、下関、鹿
児島、高知、ソウル、大連などの市場
の建設を指導。市場研究の権威とし
て知られた。同7年、森田茂市長に
ひき立てられ、助役となり、同16年6
月高知市長に就任。17年6月には長
浜、朝倉、鴨田、五台山などの周辺地
の町村を合併した。



高知市長時代の
大野勇氏
高知新聞社提供

資料受贈報告

寄贈資料から

『夜しか泳げなかった』
古矢永塔子著 幻冬舎刊
2024年7月 四六版 292頁
幻冬舎 寄贈



古矢永塔子さんは、青森県生まれ、高
知県在住の作家です。大学を卒業後、東
京でIT系企業のプログラマーを経験
し結婚を機に高知県に移住されました。
お子さんの「お母さんの将来の夢は？」
というふとした会話に、「お母さんはも
う大人だから」と返したところ「大人は
夢を見ちゃいけないの？」と不思議そう
に言われたことをきっかけに、毎日少
ずつ物語を書き続け夢を追い続けてき
たそうです。2018年に小説家として
デビューし、2020年『七度笑えは、
恋の味』で第1回日本おもしろい小説大
賞を満場一致で受賞。心温まるストー
リーと共に登場するおもしろい料理
で読者の喉を鳴らしました。
今回ご寄贈いただいた『夜しか泳げな
かった』は、東京に住む高知市出身の高
校教師が偶然手にしたベストセラー小
説に衝撃を受けたところから物語は始
まります。彼が高校時代に病気で余命少
ない同級生と過ごし、封印した思い出

酷似した小説。その著者である覆面作家
が勤務先に転校生として現れ、過去と現
在を行き来しながら次々と物語は展開
していきます。現在高知県にお住まいの
古矢永さんですが、本作の中には三色羊
羹や田舎寿司がのった皿鉢料理、厚切り
トーストと味噌汁にバスタなど盛り沢
山でサービスピ精神あふれるモーニング、
朱色の桁橋「はりまや橋」、お酒好きの人
が集まる「ひろめ市場」、空港の名前やイ
ラスト入りのステッカーなど「どこもか
しこも坂本龍馬」、という高知の風景も
随所に描き込まれています。小説を片手
に舞台となった場所を訪れ、作品の空気
に触れてみてはいかがでしょうか。
(学芸課/山崎真理)

受贈報告

(令和6年11月、令和7年1月) 敬称略

- ▼宮尾環「宮尾登美子愛用の机」他
- ▼中脇初枝「女の子の昔話えほん」ドイツの
おはなし「日曜日生まれの子」再話…
- ▼中脇初枝 絵・さとらゆうすけ 偕成社
刊
- ▼祥伝社「蝦夷の侍風の市兵衛式」 注堂
魁著 祥伝社刊
- ▼湯浅篤志「大正時代の不思議小説パンフ
レット03 疑問の犯人 白浜潮花著 湯浅
篤志編 ヒラヤマ探偵文庫刊」
- ▼大國英子「ミツヤマ探偵文庫」26号
日本ルイス・キャロル協会編刊
- ▼四宮義正「徳島科学史雑誌43号」
- ▼渡邊史郎「香川大学国文学研究会刊」
- ▼香川大学国文学会編刊
- ▼竹内直人「開花期」7集 片岡文雄編
開花期の会刊 他
- ▼山形敬介「GUILTY」49号
ギルティ編集局編刊
- ▼三浦光世「風やまず」三浦良一著
文芸社刊 他
- ▼長谷部菜穂子「詩集 紙燭の歌」
市原麟一郎著 階香島編輯部刊
- ▼やまもとさいふ「詩集 夢の途中」やまもと
さいみ著 土曜美術社出版販売刊 他
- ▼林亮「句集 詩筒 林亮著刊」
- ▼松月清郎「図書館で真珠採り」
- ▼松月清郎著 月兎舎刊 藤田文江著
谷口哲郎・藤田文江全集 藤田文江著
日本歌人クラブ「日本歌人クラブアンソ
ロジー2024年版 現代万葉集
日本歌人クラブ編 短歌研究社刊」

常設展示室入替

常設展示入れ替えのご案内

高知県立文学館の常設展示室は、「変わる常設展」。年に一回、数名の作家を入れ替えています。

今年度は、宮崎夢柳、大町桂月などを入れ替える予定です。

宮崎夢柳は高知市生まれで、自由民権運動家であり、新聞記者でもありました。「自由新聞」にフランス革命を題材とする翻案小説『自由の凱歌』を発表し、一世を風靡したことで知られています。自由民権運動下で執筆された作品には、民権思想を世にわかりやすく伝えるために書かれたものが多く、執筆者も政治家としてすでに名を成している人物や、書生が一作だけ書いてみた、といったようなものが多いのですが、夢柳はそうではありませんでした。自由民権運動よりも執筆活動に重きを置いていた夢柳は、この時代には珍しく、小説家あるいは翻訳家として一生を終えた人物であつ

たと言えるかもしれません。今回の展示では、夢柳著作の『勤王済民 高峰の荒鷲』『一滴千金 憂世の涕涙』『虚無党実伝記 鬼啾啾』などの明治期の貴重な本を展示予定です。

また、大町桂月は今年が没後百年という記念の年です。学生時代より、能作家として知られ、博文館に入社後、評論などを執筆しました。与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」を批判し論争を呼びますが、終生旅と酒を愛して「十和田湖」などを紹介するすぐれた紀行文を書き、最後は青森県の蕪温泉で没しました。これまで当館ではたびたび大町桂月展を行っていますが、今回の展示では紀行文、特に登山についての本を紹介し、あわせて桂月直筆の漢詩の軸を展示してその魅力にも迫りたいと思います。

なお、当初予定しておりました上田秋夫は令和7年度に変更となりました。また、「ドラマ「あんぱん」で注目されるやなせたかし先生の展示も近いうちに予定しており、こちらは常設展初となります。どうぞお楽しみに。

(学芸課／川島禎子)

「おはなしキャラバン」活動について

高知県立文学館では、毎月第1土曜日に、当館カルチャーサポートによる土佐民話紙芝居や絵本の読み聞かせ活動を行っています。

2月1日には、2月のおはなしキャラバンを行いました。午後から冷たい雨になりお客様がいっぱい、小学生の児童や保護者の方が集まってくれました。

まずは、市原麟一郎先生の土佐民話紙芝居からのスタートです。翌日が節分ということで、貧しい夫婦が節分の豆を撒かず挽いて食べたことから貧乏神に助け

られるお話「びんぼうがみさま」を聞いていただきました。参加してくれた小学生は、土佐民話の紙芝居を聞くのは初めてということで、「びんぼうがみのおかげで福が来るのがすごいおもしろかった」と感想を聞かせてくれました。

紙芝居の後はクイズ「何のしっぽかな？」と「漢字当てクイズ」です。小学生には易しかったようですが、全部あっさりと当てられてしまいました。大きな声で、お友だちと声を合わせて答えを言うようになって、こちらがワクワクしてうれしかったです。また、この日は2人の高校生サポートが参加してくれ、クイズの出題も手伝ってくれました。

最後は絵本「ねこの看護師ラディ」の読み聞かせです。瀕死の状態から助けられたねこのラディが、動物介護センターで多くの動物にそつと寄り添い続ける実話をもとに書かれた絵本です。みんな真剣に聞いてくれました。

短い時間でしたが、文学の端緒に触れる時間を子どもたちと共有でき、感謝しています。これからも「おはなしキャラバン」の活動を続けていきますので、ぜひお越しください。

(学芸課長／織田敦子)





ただいま開催中の「いなかずまいは至極無事ぢや〜漢詩文をたのしむ五山文学展〜」には、高校生の頃漢文の授業が大好きだった、書道部だった、夢窓疎石と吸江寺の関わりがずっと気になっていたので、とおっしゃる方が多数お越しになっています。

ミュージアムショップでは企画展にあわせ、土佐が誇る義堂・絶海を輩出した津野町の香り豊かなお茶をたくさん取り揃えました。パッケージがかわいくお土産にもお勧めです。

企画展を監修いただいた朝倉和氏著の『絶海中津研究人と作品とその周辺』をはじめ、「禅林の文学」、お寺や庭園などに關する書籍も販売しています。五山文学に思いを馳せ、リラックス効果のある馥郁としたお茶の香りに包まれてみてはいかがでしょうか。

(総務事業課/森光美和)



館長エッセイ

日本の伝統文化の承継に期待 ユネスコ無形文化遺産登録

澤田 博睦

コロナ禍からの反動か、5類移行ですっかり復調してきた宴会。ただ、私自身はかつてのように二次会、三次会で歌ったり騒いだりということもなくなり、どこか不完全燃焼で家飲みだけの酒だけが増えているような…。(新型コロナウイルスのせいにしてはいいですか?)

そんな中、昨年ユネスコ無形文化遺産に「日本の伝統的酒造り」が登録されたことは、改めて日本のお酒文化を見つめ直すいい機会になりました。とりわけ、皿鉢を囲んで返杯・献杯やお座敷遊び、さらには大杯飲み干しといった独特の酒文化を有する高知県民の一人として、いわば復権を果たしたかのような高揚感を覚えたものです。

ユネスコ無形文化遺産には、これまで2013年「和食」、2014年「和紙」も登録されています。酒造りを含めてこうした日本の伝統的な文化が世界に認知され、国内外から注目されることは、各地で維持・発展

に尽力されてきた関係の皆様のご努力の賜物と、心から敬意を表しますとともに、これを機に若い世代への文化の承継に期待したいと思います。

私がささやかな楽しみとしている書道も、ユネスコ無形文化遺産の登録に向けてエントリーしています。書道人口の減少が進んでいますが、書は年を経るごとに新たな発見があつて奥深さを感じます。伝統的酒造りに続いて書道、華道と登録されて、日本の伝統文化がますます海外から注目される日が待ち遠しいものです。

初々しい高校生の書が花を添える企画展「いなかずまいは至極無事ぢや〜漢詩文をたのしむ五山文学展〜」もお見逃しなく。



「進」

高知県立文学館カレンダー



いなかずまいは至極無事ぢや

漢詩文を楽しむ五山文学展

- 会期 令和7年1月18日(土) ≫ 3月23日(日)
- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 休館日 会期中無休
- 場所 2階企画展示室
- 観覧料 500円(常設展含む) 長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

展覧会の紹介をしています! 詳しくは2ページ目をご覧ください。



花咲くモダンデザイン

～大正イマジユイの世界～

- 会期 令和7年4月5日(土) ≫ 6月15日(日)
 - 開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
 - 休館日 会期中無休
 - 場所 2階企画展示室
 - 観覧料 600円(常設展含む) 長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料
- 橋口五葉装幀・吉井勇著「毒うつき」(部分) 1918(大正7)年

展覧会の紹介をしています! 詳しくは表紙・3ページ目をご覧ください。

多彩な関連イベントも開催!

記念講演会

永山 多貴子氏(郡山市立美術館館長)が大正イマジユイの世界を分かりやすくお話します。

- 講師 永山 多貴子氏(郡山市立美術館館長)
- 日時 令和7年4月6日(日) 午後1時～2時30分まで
- 場所 高知県立文学館1Fホール
- 定員 100名
- 参加費 要当日観覧券
- 申込 電話または当館受付にて事前申し込み

大正クイズ

展示を観ながら楽しくクイズを解きましょう。正解数に応じて、ステキなプレゼントがあります。

- 日時 令和7年5月3日(土・祝)、5月4日(日・祝)、5月5日(月・祝)、5月6日(火・休日)、6月7日(土)、6月8日(日) 各日とも①午前10時～12時②午後2時～4時まで
- 場所 高知県立文学館2F 展示室前ロビー
- 参加費 要当日観覧券
- 申込 事前申込不要 ※直接会場までお越しください

麗しの花 吊るしライト作り

花の形をしたぼんぼりにビーズを通して、吊るしライトを作りましょう。

- 日時 令和7年5月11日(日)、5月31日(土)、6月1日(日) 各日とも午後2時～4時まで
- 場所 高知県立文学館1Fホール
- 定員 各日50名
- 参加費 当日観覧券と材料費500円が必要です。
- 申込 電話または当館受付にて事前申し込み



大正時代の音色 寅彦の蓄音機実演

大正時代に活躍した寺田寅彦の蓄音機を動かします。貴重な大正時代の音色を体感してみませんか?(機械や部品の不具合により、やむなく中止になる場合があります)

- 日時 令和7年6月15日(日) ①午前10時～11時 ②午後2時～3時
- 場所 高知県立文学館1Fホール
- 定員 各回50名
- 参加費 要当日観覧券
- 申込 電話または当館受付にて事前申し込み

観覧料改定のご案内

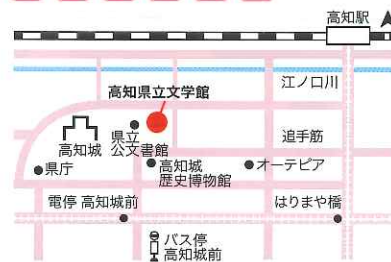
高知県立文学館では、令和7年4月1日より右記の通り観覧料の改定をさせていただきます。ご利用される皆様には大変恐縮ですが、何卒ご理解くださいますようお願い申し上げます。

- 企画展開催期間(常設展含む)…企画展ごとに異なります。
- 企画展を開催していない期間(常設展のみ)…一般400円

利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休 ※その他、メンテナンス等で臨時休館することがあります。
- 観覧料 常設展一般370円 企画展はそれぞれ異なります。20名以上の団体は2割引。高校生以下無料。身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者(1名)、高知県・高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。(窓口で手帳等のご提示をお願いする場合があります)
- 駐車場 なし。ただし近隣に有料駐車場があります。
- 附属設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「霞雲庵」
- 貸出施設 企画展示室、ホール、茶室
- 運営 公益財団法人 高知県文化財団

交通のご案内



- JR高知駅から徒歩20分(またはバス・路面電車を利用)
- バス・路面電車「高知城前」から徒歩5分
- 高知龍馬空港から空港連絡バス「北はりまや橋」下車、徒歩20分



高知県立
文学館

〒780-0850
高知市丸の内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857

高知県立文学館 検索

